



調査研究成果展「こふんじだい古墳時代の祖霊観それいかん」が開催されました

- 期間 平成29年9月2日（土）～10月9日（祝・月）
- 場所 向日市文化資料館
- 内容 「いつかはらこふん五塚原古墳」出土のはにわひつき埴輪 棺 等の展示

今回の展示は、平成28年実施の発掘調査で「五塚原古墳」の墳丘西端から出土した埴輪の棺を復原し、初公開するという趣旨のもと、速報展示会として実施されました。



「五塚原古墳」は3世紀半ば頃につくられた最古級の古墳であり、この頃は大王級の古墳を除き、埴輪を供える風習はまだありませんでした。つまり、本来「五塚原古墳」には埴輪が並べられていなかったのです。

ところが、その「五塚原古墳」から埴輪が発見されました。しかも、その埴輪を研究したところ、100年も経過した頃につくられた「みょうけんやまこふん妙見山古墳」*から出土したものと高い共通性をもつことが判明しました。



また、埴輪棺の大きさからまいそうしゃ埋葬者は未成人がかいそうこつ改葬骨であると考えられること、埴輪は「妙見山古墳」から運ばれてきて再利用された可能性があること、「五塚原古墳」の被葬者と埴輪棺の埋葬者との間には何らかのけいふかんけい系譜関係があることが判明しました。

このことから、おそらく幼くして亡くなった「妙見山古墳」ひそうしゃ被葬者の親族が、先祖との関係を示すため「五塚原古墳」に埋葬されることになり、その棺として「妙見山古墳」に供えられている埴輪が使われたのではないかと考えられています。

事実がどうであったか、未だ不明な点が多くありますが、このような研究成果は他に例がなく、全国から注目が寄せられています。



※ 妙見山古墳 — 4世紀半ば頃、「五塚原古墳」から北西へ500m離れた場所に築造された古墳で、埋葬施設や多数の副葬品、埴輪が確認されています。



〔五塚原古墳出土の埴輪棺〕※1

この埴輪棺は、主墳（五塚原古墳）の築造後にその被葬者の家族や親族を古墳の周辺に葬る「周辺埋葬」に相当します。埴輪棺の埋葬空間は内法の長さが 80 cm程で、未成人か改葬骨が納められたとみられます。棺に使用された埴輪については、本墳にその樹立が考えられないため、他所より持ち込まれ埋葬に使用されたものと推測できます。埴輪の特徴からみて、本墳から北西へ 500m 離れた場所に築造された妙見山古墳から運ばれてきた可能性が指摘されています。五塚原古墳の被葬者と埴輪棺の埋葬者との間には何らかの系譜関係があり、世代を超えて先祖と子孫のつながり（出自関係）を示すものとして注目を集めました。さらには、埴輪棺を通じて五塚原古墳と妙見山古墳の被葬者の間にも接点をみいだすことができ、両者を同じ親族系譜のなかで位置付けることも可能となり、埴輪の復原研究に期待が寄せられていました。

〔埴輪棺の特徴〕※2

埴輪棺は亡骸を納める棺の本体に朝顔形埴輪を、また、その両端と透孔を塞ぐのに楕円筒埴輪を打ち欠いて使われていることが復原作業の結果わかりました。

(1) 朝顔形埴輪

「壺部」は球胴の体部を有し、肩部と頸部付近に突帯をめぐらせ、口縁部は短く立ち上がる。筒部は3段分が遺存し、底部は打ち欠かれているが、4段か5段に復原できる。残存高 66 cm、壺部口径 20cm、突帯間隔 16.5 cm、器面調整は外面がタテハケ、内面はナゲが施される。透孔は方形を四方向に穿たれ、突帯の形状は低い台形もしくは方形を呈する。胎土は石英、長石、チャート、赤色斑粒を主に含み、向日丘陵の埴輪の組成と同じくする。外面には赤色顔料が施される。

(2) 楕円筒埴輪

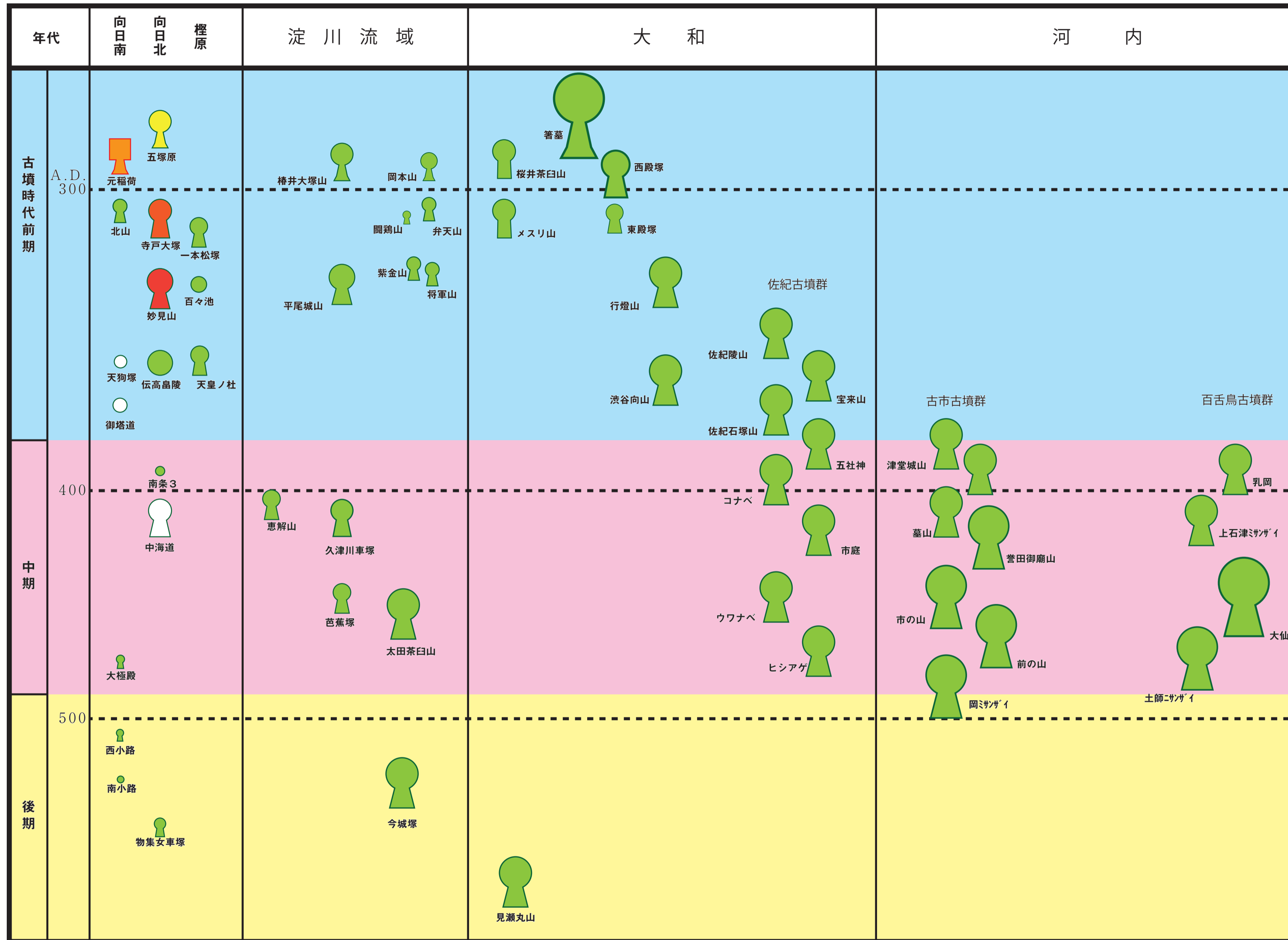
四段分が遺存する。一段おきに方形の透孔が四方向に設けられる。突帯間隔は上段が 17 cm、下段は 18 cmでその形状は大きく突出する。長径 42 cm、短径 30 cm。胎土や顔料の有無は朝顔形埴輪と同じである。

〔五塚原古墳と妙見山古墳の埴輪の共通性〕

妙見山古墳は京都大学によってこれまでに 3 回の調査が行われています。最初は、大正 9 (1920) 年に実施され、後円部の埋葬施設と墳丘の埴輪列が確認されています。このとき、後円部の墳頂端には直径約 30 cmの円筒埴輪と長径 48 cm、短径 30 cmの楕円筒埴輪（基部だけが遺存）が交互に配置されていることを明らかにしています。

第 3 回目となる昭和 42 (1967) 年には、東くびれ部で葺石と埴輪列が確認されています。このとき、多数の埴輪が出土し、円筒埴輪の基部が 5 個体と多数の破片が採集されています。これらの中には、直口壺や二重口縁壺を象徴した朝顔形埴輪や口縁端部をわずかに屈曲させる普通円筒埴輪があり、胴部に方形、逆三角形、円形の透孔を施し、断面方形の突帯をめぐらせるなどの特徴がみられました。とくに、朝顔形埴輪では肩部と口縁部の境目にめぐらせる傾向の強い突帯が、本墳の場合外側へ少しはずして肩部上に設けられています。

これまでに、破片資料どうしの比較で両古墳の共通性の高さが確認できていましたが、今回の復原により、あらたに楕円筒埴輪の存在がわかり、いっそう、妙見山古墳の埴輪を再利用していた可能性を補強する成果が得られたと考えられます。



向日丘陵の主要な古墳と築造時期